

2011年4月26日

【記者会見の趣旨】

私の息子 原田信助（当時 25 歳）は、平成 21 年 12 月 10 日午後 11 時頃、帰宅のため、新宿駅構内を通行中に、見知らぬ男子大学生より、突然階段から引き落とされ、暴行を振るわれました。

その後、女性に『痴漢』と言われて駆けつけた 2 人の駅員に、息子は襟首を掴まれたり、突き飛ばされたりしました。駅員の通報で、新宿駅西口交番から駆けつけた 3 人の警察官には『任意同行』と称されて、交番に連行された後拘束され、「あなたは被害者なんだから、警察署に行って刑事さんに話をしなければならぬ」と騙されて、パトカーで新宿署に連行されました。

息子は、新宿署の刑事に「痴漢容疑の取調べだ」と言われて、初めて自分に痴漢の容疑がかけられていることを知りました。

息子は、自分が一方的に暴行を受けた被害者であることを説明しましたが、3 人の刑事は、息子の被害の訴えを取り上げないまま、息子を痴漢の被疑者として、朝の 4 時頃まで取調べを行い、その結果、息子の訴えが通り、後日、新宿署に暴行の被害届を提出することになったものの、刑事の「お互いに訴えあえ」「証人として、駅員さんの話を聞く」等の言葉に打ちのめされ、長時間の取調べのため、心身ともに疲れ果てて、翌朝自殺に追い込まれました。

さらに、警察は、亡くなった息子を痴漢の被疑者と認定して書類送検し、一方で、息子が必死で訴え続けていた暴行被害に付いては、捜査を行わないまま、書類送検も行わず、事件として終わらせてしまいました。

息子は亡くなりましたが、だからといって、息子の受けた暴行被害と理不尽な警察の行いが、社会的に不問に付されてよい筈がありません。息子は今は何も語ることはできませんが、確かに当時ははっきりと被害を訴え、加害者に対して処罰を求めています。

私が、その夜、息子の身に何が起きたのかを詳しく知ることができたのは、息子が英会話の勉強のために持ち歩いていたボイスレコーダーを、私に残してくれていたからです。新宿西口交番と新宿警察署の取調べの一部始終を録音したボイスレコーダーには、突然の暴行によって傷ついた身体の手当てもされず、自分は 110 番をした被害者だと言っても調書のメモでさえ取ってもらえず、電話も許されず、身に覚えのない男として最低の侮辱である痴漢の被疑者として一方的に追及され、どんどん衰弱していく息子の声が収められています。

息子の人生は、希望に向かって歩み始めたばかりでした。息子は意思の強い努力家で、JAXAに入る時には一日15時間も勉強していたことを、親友の方から教えて頂きました。息子がいなくなり、初めて一人暮らしの息子の部屋に入りましたら、部屋中本がいっぱい、資格試験の参考書が積まれていました。事件の前月には、情報処理技術者の資格も取っていました。他にもまだまだ人生で挑戦したいことが沢山ありましたし、「将来、早稲田大学に奨学金をつくりたい」という夢もありました。

警察の取調べにより、息子のプライドも人生観も、どんどん破壊されてしまったのです。昨年の1月11日に、私が新宿警察署で当時の副署長だった黄海氏と会見した時に、「女性が『痴漢』と言えば、調べるのは我々の仕事です」と黄海氏はおっしゃいましたが、【男性を何人も連れて歩いている女性のお腹を、階段ですれ違いざまに痴漢する】といった考えられない状況の元の申告に、まともに取り合った警察官こそ調べるべきと考えます。

昨年の12月27日の警視庁通信指令本部の証拠保全の検証において、「お腹を痴漢された」被害を申告した女性が、事件の翌朝には「(息子は)人違いだった」と証言していた事実が明らかになりました。

人違いであることが判っていながら、1月29日に、息子を「東京都迷惑防止条例の被疑者として、書類送致した新宿署の行為は、犯罪と言わざるを得ません。

この度、国賠を提訴したのは、息子の名誉の回復のためと、この国の警察の捜査によって、息子のような被害者を二度と出してはいけないという思いからです。どうぞ、皆様のお力を私にお貸しください。よろしく願いいたします。

平成21年12月10日 JR新宿駅構内集団暴行事件 被害者 原田信助  
母 原田 尚美